ウィズコロナ時代の中小企業経営

歴史に学ぶ

第五十一回 悪女ではなかった！ 幕府財政を救った日野富子

大阪経済大学特命教授・経済評論家 岡田晃

「日本三大悪女」と呼ばれる女性たちがいる。北条政子、淀殿、日野富子だ。中でも富子は「我が子かわいさから応仁の乱の原因を作った」「賄賂を受け取り政治に口出しした」「高利貸しで大もうけした守銭奴」などと言われている。だが歴史をきちんと紐解くと、そのような悪評の多くは根拠のないことがわかる。

「富子＝応仁の乱の原因」はウソ

富子は一四四〇年、有力公家の日野家の娘として生まれた。日野家は、室町幕府の三代将軍・足利義満をはじめ歴代将軍の正室を出していた家柄で、富子は十六歳で八代・義政の正室となった。

やがて結婚から十年近く過ぎ、二人の女子を授かったものの、男子には恵まれなかった。そこで義政は、すでに僧となっていた自分の異母弟・義視（よしみ）を説得して還俗させ後継者とした。同時に、義視の後見人に細川勝元を指名している。だが皮肉にも翌年、富子は男子（後の九代・義尚（よしひさ））を出産する。

応仁の乱が起きたのはその二年後の一四六七年だ。軍記読み物の『応仁記』には、富子が我が子を将軍にしようとして有力大名の山名宗全と手を組み、義視を排除しようとして乱が起きたと記されている。

しかし専門家によると、当時の公家や僧侶の日記にはそのような記述はないという。『応仁記』は乱終結から数十年後に書かれた物語で作者も不明だ。数年前のベストセラー『応仁の乱』の著者、呉座勇一氏は「『応仁記』は同時代史料と比べて信頼性が大きく落ちる。公家・僧侶の日記に見られない以上、『応仁記』の記述は疑ってかかるべき」と指摘している。

実際には、この乱の原因は有力大名・畠山氏の内部抗争にあった。これに他の大名が介入して争いが大きくなり、細川氏らの東軍 VS 山名氏らの西軍の戦いが十一年にわたり続いたのだった。

次期将軍争いが絡むようになったのは、乱勃発後のことで、それも義視の方から争いを大きくしていたのだ。乱の当初、将軍・義政は中立の姿勢をとったものの事実上は東軍支持の立場をとり、義視も東軍の首脳として行動した。だが僧侶出身の義視は自前の権力基盤を持っておらず東軍内部で孤立するようになる。翌年になると東軍を脱出、一転して西軍の総大将に迎えられたのである。これだけを見ても「富子＝応仁の乱の原因」説が根拠のないことがわかるだろう。

幕政の事実上のトップに脆弱だった幕府財政基盤

義視の失脚によって次期将軍は義尚との流れが固まり、一四七三年、義尚が九代将軍となった。だが義尚はまだ九歳。本来なら義政が新将軍を後見・指導すべき立場だが、義政はその頃すでに政治への意欲を失っていた。乱が長引いたのも、義政のリーダーシップ欠如が影響していた。

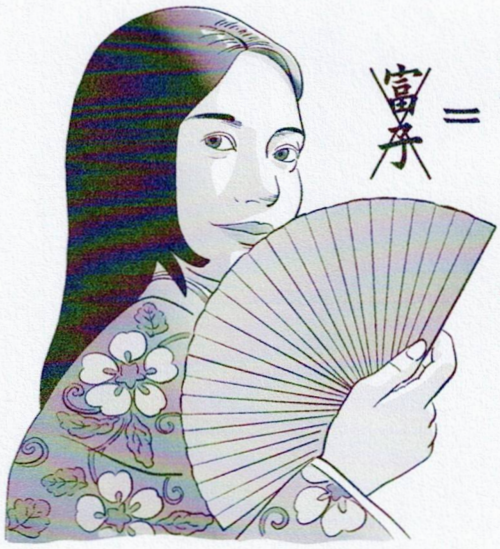
そのため、富子とその兄・日野勝光が政治の中

心を担い、三年後に勝光が亡くなってからは、富子が幕政を一手に握るようになった。

事実上、幕府のトップに立った富子のもとには各方面から献金が集まったようだ。ある高僧の日記には「富子のもとに多くの料足（おカネ）が集まっている。この方が天下の政治を取り計らっているからだ」と書かれている。

このあたりが「賄賂でカネ集め」「守銭奴」といった悪評の原因とみられるが、当時は幕府や朝廷に献金や献品することは常識あるいは慣例となっていた。現代の尺度で見れば賄賂とみなされるものが多かった可能性が高いが、それを以って富子だけを批判するのは適切ではないだろう。

富子がカネ集めを積極的に行ったことは事実のようだが、それには幕府も足利家も財政基盤が脆弱だったという背景があった。そのうえ、応仁の乱をはじめとする戦乱によって年貢米の納入が滞る状態だった。こうした苦境を打開するため新たな収入源が必要だったのだ。



応仁の乱の原因

ただ、それらの収入で私腹を肥やしたのではなかった。その例をいくつか紹介しよう。

一四七七年、西軍の中心人物だった畠山義就に多額のカネを貸した。これが「敵の武将にまでカネを貸して大儲けした」との〝説〟の出どころとなるのだが、その二カ月後に義就が地元・河内に引き揚げた。それを見た西軍諸将が相次いで兵を京都から引き揚げ、乱が終結した。

呉座氏は「カネを渡した相手は義就ではなく、東軍の畠山政長（義就の従兄弟）の間違いではないか」と指摘しているが、いずれにしても富子が自分のカネを使って戦争を終わらせたと言えるのである。

また応仁の乱では数多くの民家をはじめ公家や武家の邸宅が焼失、時の天皇と上皇も内裏からの避難を余儀なくされた。このため富子は自分が居住する室町邸を避難先として提供した。しばらくしてその室町邸も火事にあい、富子は天皇の再移転先も提供した。さらに、朝廷や公家への資金援助も行っている。

乱の終結後には、内裏修復造営のため京都の七口（出入り口、実際には七カ所以上あったとされる）に関所を設け、関料（通行料）を徴収した。長年の戦乱で苦しむ人たちへの増税であり、そのために激しい一揆が起きる原因となった。この点は批判されても仕方のないところだ。

ただ、よく言われるように「徴収した関料を自分の懐に入れた」という事実は確認されていない。それどころか富子は私財を投じて京都の町の復興に力を尽くしている。

ジェンダー差別の解消をトップのリーダーシップが重要

これらの歴史から、何を学ぶべきなのだろうか。

第一は、富子こそ女性リーダーの先駆者だということだ。富子の政策の中には前述のように適切ではなかったものもあるが、それを事実に基づいて批判するのではなく、要するに「女が政治に口出しした」という悪評なのだ。この感覚は現代でも根強いものがある。それは企業経営においても同様だ。制度上はもちろん、意識の面でもこうしたジェンダー差別を解消していく必要がある。

第二は、トップのリーダーシップの重要性だ。富子が手腕を振るったのは、義政が優柔不断で統率力が欠如していたからだ。義政は政治への意欲をなくし、もっぱら趣味の世界に没頭した。彼のそうした行動により幕府の弱体化が一段と進み、やがて戦国時代へと移っていくことになる。

まさにトップのリーダーシップが企業の命運を左右することを、この歴史は教えているのである。

岡田 晃（おかだ あきら）
一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授、同特別招聘教授を経て、二〇二五年に同特命教授。